



2010. 2  
No.9

認定 NPO 法人 C.P.I 教育文化交流推進委員会  
発行所：C.P.I.スリランカ事務所  
Mahindarama Road, Etul-Kotte, Kotte, Sri Lanka

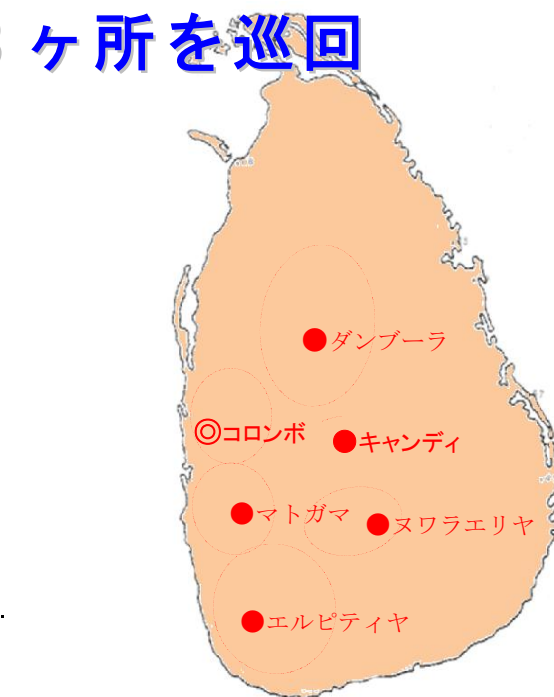
日本本部：東京都三鷹市中原 2-16-9 Tel:0422-49-3808  
E-mail: cpimate@gmail.com  
URL: <http://www.cpi-mate.gr.jp>

里子たちを励ますことのできる喜びを分かちあおう 小西会長の寄稿

## 全国の地域センター33ヶ所を巡回

地図をご覧になり、子どもたちに会えた地域をみて下さい。東部・南部訪問は、8月に行う予定です。学校の大切な行事で来られない学生もいましたが、概ね集まってくれて、有意義な会合になりました。会うことができた学生の教育里親さんには、各地域の学生の気持ちのこもった写真と署名を、「年度末報告」に添えてお送りいたします。教育里子たちを励ます機会を私に下さっている会員の皆様に、感謝を申し上げます。

ところで、会員さんから「小西さんは里子にどのような話をしているのですか」と質問されることがあります。そこで今回、その一端を再演してみようと思います。里子巡回は、SNECC 事務局長チャンダシリさんと共に行っています。到着したとき、大抵の場合、学生たちは緊張しています。ですから、私は「勉強」とは別の話をすることにしています。



また、私たちが二人で行くとき、いつも掛け合いによるジョークから始めて緊張をほぐすようにしています。教育里子巡回の面白味も、醍醐味も、その場にこそある…といえますが、できる限り再演を試みます。会合の雰囲気をご覧戴ければ幸いです。



掛け合いをして、子どもたちを和ませる小西会長とチャンダシリさん

## マトガマに集まった教育里子たちとの話

(全員に聞く)音楽演奏をする人は?…(数人)  
コンピューターが好きな人は?…(3人ほど)  
化学実験が好きな人は?…(2人、手をあげる)  
なるほど。

あなたたちの年齢になると、  
自分なりの雰囲気が出てきます。絵を描くこと  
…踊り…数学、好きなことに無我夢中で取り組  
んでいると、周りの人が、あなた方のもっている  
雰囲気であなた方を分かるようになります。  
「本気で取り組む」と、その様子は、大人から  
は見えるし、仕事を頼まれるようになる。  
それが、実力を認められるということだし、  
そうやって大人になっていくわけですね。  
もちろん、失敗するときもある。そのなかで、  
いろいろと変わっていく自分がいます。  
それこそが、若い生命の証明だと思います。  
大事なのは、変わっていく自分自身を知ること  
です。今日は、その話をしようと思います。

日記をつけている人は?…いない…?

それは残念。私は、高校三年生まで日記をつけ  
ていました。学校であったこと、ニュースを見  
て考えたこと、好きな女性のこと…恋人になる  
のかどうか…そのときの自分はわからない…  
(みんな笑う)。

記憶を確かめていくと、わかることがある。  
経験を日記につけると、自分のしたこと、上手  
くいった『理由』、失敗した『理由』が見えて  
くる。失敗を繰り返さないですむようになる。

自分の失敗談だが…。

先日の夜、私は、コッテのセンターで顔を洗う  
ため洗面所に行って邪魔だから時計を外した。  
恥ずかしいことだけれど、そのあとのことを、  
何もおぼえていなかった。二時間ほどして時計  
をみようとしたら、時計が腕にない。憶えてい  
るのは、洗面所で外したことだけ…。  
朝が来て、「時計を洗面所で無くしたけれど、  
だれか仕舞ってくれていますか?」と、泊まっ

ている人たちに聞いてみましたが、誰も知らない  
……みんな、心配してくれました。

ひとりになって、部屋の中や着ているものを観察  
してみると、昨日の夜と、今朝とでは、別のズボ  
ンを穿いたことに気がつきました。そこで昨日の  
夜のズボンのポケットを探すと……なんと時計  
があるじゃないですか。

(みんなクスクス笑い)

慌ててセンターの皆に話しました、  
「ありました、どうもすみません」…こんな  
恥ずかしいことは……(みんな爆笑)。  
上手くいくときも、失敗するときも、恥ずかし  
いことも、自分の中に原因があることが多い。  
時計がなかったのは……  
昨日のアホな自分がいたからで(爆笑)  
笑いの中にこそ真実がある!!(また爆笑)  
上手くいくときも、失敗したときも、一つひとつ、  
自分の中に刻んでいくことが大切です。

学科で悪い点をとっても、それがどうした!

大切なのは、点数じゃない。

そうなった理由が大事だ。

きれいな学科だったから?

どうしてきれいになったの?

先生が嫌いだったの?

その時間に好きな本を読みたかったの?

どうしても、その本が読みたかったの?

それは何故?

考えていく中に、自分が見えてくる。

そのことが大事だ。

その上で、少し角度を変えて考えてみよう。

いまは嫌いな学科でも、後で必要になることが  
ある。少なくとも、どういうとき必要かを知って  
おいて損はない。だから、嫌いでもとにかく取り  
組んで勉強したほうがいい。その中から、  
ほんとうに好きなことを見つけられるものです。  
スリランカの普通課程の学科をみると、皆さんは



経験できるチャンスは多いと思います。  
数学、会計、化学、物理、歴史、地理、語学、  
触れることができる科目がたくさんある。  
絵や彫刻、音楽、踊り、スポーツをする機会も  
多い。これは、とてもよいことです。  
どんどん経験して自分自身を発見して下さい。

ところで、好きなことでも、困難なことはたく  
さんあるだろう。例えば道具が足りない、器具  
が揃っていないと困るね。  
そういうとき、どうしていますか？

あなたたちは、ほんとうに好きなことなら、  
そして皆が困っていることなら、足りないとき  
は、「足りない、ほしい」と言っているのだ。  
C.P.I.の人たちは、あなたたちが、ただ、お金  
をもらうだけの奨学生ではないこと、  
『日本との交流を望んで、勉強に頑張っている  
青年たち』であることを、みんな知っている。  
だから、ほんとうに必要ななら、SNECC に伝えて  
ください。C.P.I.のわたしたちは、真剣に考え  
て解決しようとしています。あなたたちが、一人ひ  
とり、良い自分をつくれるように、一緒に気持  
ちを合わせて生きていこうとしているのが、  
C.P.I.の教育里親さんたちだと信じて下さい。

ただし、ひとつ注意したいことがある。  
「自分だけがもっているとカッコよいから」  
とか、個人的なエゴイズムで、個人的に里親さ  
んに頼むことは、それはよくない。  
一時的には「嬉しいこと」かもしれない。

**(中略：関連あるワークショップを行う)**  
周りを気持ちよくさせることで、自分も気持ち  
よくなる、それが「気持ちいい」ということだ、  
とわかってもらえたと思う。すべての仕事、ス  
ポーツでも、芸術でも同じだろう。

さて、里親さんに手紙を書いて下さいと、さき  
ほどチャンダシリさんが話しましたね。  
そのことについて話したいことがあります。

里親さんは変わっていくあなた方の『今』を  
知りたい。試験の点数を知りたいのではない  
(稀に、点数を知りたい人もいるけれど)。  
本当に好きになってきたことは何なのか、  
そのことは、どうしてわかったのか、  
成果はどのようにあらわれたのか、  
失敗があったとしたら、  
そこから何を学んだのだろうか、  
そういうことを里親さんに手紙で書くことで、  
その手紙を読んだ里親さんは楽しくなる。  
発展していく人を見るのは楽しいからだ。  
あなたたちにとっては、手紙を書くことで、  
自分の中に経験を刻んでいくことになる。  
それがあなた自身を造っていく。

そういうことを通して、よい雰囲気をもった人  
になろうではありませんか。  
それは、とても格好いいことだ。  
みんな、強く格好よく生きていきましょう。  
来てくれてありがとう、また会いましょう。



里親さんに呼びかけの写真を撮る教育里子たち



気持ちをこめて寄せ書き署名をする

# スリランカの子どもたちは、こんなことをしています

「生活の改善は、こどもたちの発案を大切にしていじめよう」との運動が盛ん

日本の子どもたちに知らせたいことがある。

日本では、高校生あたりから「ウザイ」と言われそうな、

「整理、整頓、清掃、清潔」あるいは「しつけ」のことだ。

これらは、頭文字をとって5S と呼ばれるが、

世界中の病院や学校で『5S プログラム』が盛んだそうだ。

言葉でお分かりのとおり、日本から発した世界規模の生活改善運動である。

日本の私たちにあって誇らしいと同時に、喜ばしいことではないだろうか。

昨年、スリランカのアンパーラの病院がアジア最優秀となり表彰された。

右下の写真のヌワラエリアの学校は、地域で一番となつたらしい。

C. P. I. と SNECC の共同施設を首都コッテに造ったときに真っ先に提唱したことは「トイレ掃除の徹底」であった。

当時、スリランカの公衆トイレはとにかく汚く、わが日本の昔を思い起こさせたものであった。

SNECC のチャンダシリ事務局長は、高僧の身でありながら先頭を切って朝の掃除とトイレ掃除に取組み、そのおかげで施設を利用する学生らに掃除当番をつくることのできた。当時我々は

「施設を維持するには、常に施設を使用し愛する人をつくること」が大切であるとの考えで、日曜学校、コンピュータークラス、芸術クラス、日本語クラスなどの充実を図り、それぞれに、ガーデン美化班、建物掃除の班、文化行事の班などの役割を振った。ちょうど、5S プログラム



5Sプログラムの標語を眺めるSNECCのチャンダシリさん

の発足と、時期を同じくしていたらしい。

いつも綺麗なスリランカ本部の施設をみると、1992年の当時を振り返って隔世の感慨がある。



5S プログラムに加えて、スリランカの学校では、子どもたちが、

学校改善箱を設けて提案を集めたり、

(これも日本から発の「KAIZEN」運動である)

「ゴミは焼却場所に」の徹底を行っている。

注目したいことは、

子どもたちは、指示されているのではなく、彼らが発案していることである。

あとで『提起』のところでも書くことだが、とても大切にしたいところだ。



右の写真は、植樹運動を広めるために、校舎に描かれた壁画である。

子どもたちからの発案が全国に広がって、「一年に一本、庭に木を植えましょう」との静かなキャンペーンが定着しようとしている。家々や学校で、たしかに緑が増えている。大きな町では、大木に育った街路樹を切らずに守ろうとしているのが分かる。日本企業が投資した大規模な鉱山開発が、民衆による、環境破壊と災害の防止運動により中止に追い込まれている。

いまのスリランカの青年層のよい点は、少年少女時代に培われていると言える。右の写真では、「私の主張」の絵画展で一等になった作品が学校の壁画となっているもので、「ちいさいときから、社会のよい発展を考えて勉強しよう」というテーマで描かれてある。

社会全体に、こうした子どもたちの芽を育て活用していこうとの雰囲気が、いまのスリランカには溢れている。これは、私たちの活動にとっても、嬉しいことと考えるのだ。



## 提起

『子どもからの発信で生活改善』が社会を動かすことに注目して考えて戴きたいことがある。2008年に、C.P.I.とSNECCは、「スリランカで交通安全を学校教育によって発信しよう!」というプロジェクトを、スリランカ警察庁、同教育省の賛同を得て計画した。JICA（国際協力事業団）のNGO連携室に資金支援を求めて、もう一步で実現するところだった。しかし、当時のJICA現地事務所から「親が守らない交通法規を、子どもたちに教えても無駄」との意見があり、実現しなかった。残念な事例であった。

教育里子の中にも、交通事故で死傷した学生たちがいる。貧しい中、勉強に頑張っている、そういう事故にあうのでは、残念である。現地社会の、「生活改善は子どもたちから始めよう」との風潮を、JICA 現地事務所が知らなかったのは嘆かわしい。子どもの交通事故が、運転する側の交通法規無視（酒酔い運転、無理な追い越し、無灯火運転、等々）で増えていることを考えると、学校での交通安全教育に、もういちど挑戦したいと思わざるを得ない。日本からの「生活改善支援」は、現実にも実効性が高い運動に繋がるのだから。関係者のご賢察をお願いしたいところだ。日本の警察学校にも相談してみたいと考えている。

# 2009 スリランカ教育里子訪問ツアー報告

## 温かい絆にあふれる7日間でした

寄稿：ツアー参加の皆さん  
ツアー団長：理事  
牟田慎一郎

今回は、福岡から5名、関東から2組の夫婦を含む6名の計11名が参加した。福岡からの参加者のうち3名は会員外であったが、内1名は、ツアーの直前に会員登録と里子縁組みを済ませての参加となった。42歳の方が1名、残り10名は60歳以上、最高齢は77歳とやや高齢のグループであったが、皆健康で無事にツアーを行うことができた。（牟田）

### ツアーのあらまし 田中絹代 福岡県福岡

#### 8月27日 東京、神奈川、茨木、福岡から成田空港から出発

PM 14:00 成田発 モルジブ経由で 23:00 スリランカ（コロンボ空港）着（時差3時間30分）  
空港ロビーで出迎える現地スタッフに会ったころには、深夜12時を回っていた。宿泊するタージサムドラホテルに着いたのは、午前1時15分であった。

#### 8月28日 10時 スリランカ日本教育文化センター着

紅茶の店やスーパーマーケットで買い物をしたあと、現地センターへ。C.P.I.のカウンターパート SNECC の チャンダシリ事務局長を始め 100 名の里子さん達が歓迎のブラスバンドで迎えて下さった。可愛い 生花のレイを首に掛けて貰いました。踊り、ゲーム、日本の折り紙、生花などで楽しく交流。夜には、キャンプファイヤーの周りで歌い踊り、新聞紙を使っていろいろな模様（蝶々、蛇など）をグラウンドに描くアイデアを見せてくれた。「さようなら」の「紙文字」には感動しました。



#### 8月29日 私の里子さんと面会の日です。

3時間もバスに揺られて逢いに見えた親子。3人の眼が輝いて見えました。言葉は互いに通じないですが、心と笑顔で分かち合えたように感じました。同行の皆様も、写真を撮ってくださったりして、大変喜んでくださいました。夜はコッテのペラヘラ祭り見物。伝統的なお祭りで、太鼓の囃子に包まれて男性が勇壮に踊り、たくさんの象さんたちもステキな衣装を身をまとい、ご機嫌な様子で私たちを喜ばせてくれました。

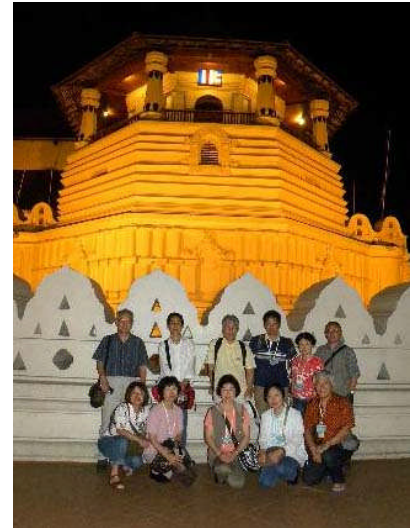
#### 8月30日 キャンディ観光（ピンナワラ 象の孤児院、植物園、仏歯寺）

2時間バスに揺られて訪れた象の孤児院では、60頭の象が気持ち良さそうに川で水遊びと洒落ていました。ペーラデニア植物園は、総面積5.6km<sup>2</sup>の広々とした敷地に、珍しい木、花、ハーブなどがあります。その中で一番に眼を引かれたのが大ジャワ・ビンロー。芝生の中央にある広く張り出した枝の下は絶好の休憩所です。また観光客相手の、独特な土産を売る人も多くいます。一日いても退屈せずに楽しめました。





夜は、キャンディアンダンス鑑賞。スリランカを代表する芸能で、もともとは仏歯寺への奉納の踊りだったそうです。激しいドラムの音に乗って女性は優雅に踊り、男性は激しい動きでトンボ返りや回転をします。手にした松明を振りまわし、あるいは火のついたそれを口に含んだりする火渡りもあります。私は火渡りのときは怖くて眼をそむけてしまいました。仏歯寺には、夜更けまで熱烈な信者がお参りに訪れます。私達もスリランカの人にまじって、お参りいたしました。信者さんたちが持ち寄る睡蓮のお花がとっても綺麗でした。



### 8月31日 バテック工房、ハーブ園見学(移動日)

キャンディは、買い物を楽しめる土産物屋さんや市場があります。午後はバティックの工房やハーブ園を見学しながら、洞窟寺院で有名なダンブッラに行きました。ここには、SNECC の大きな幼稚園もあります。宿泊はアマヤレイクホテルでした。オイルランプセレモニーなどのおもてなしが良かったです。

### 9月1日 ポロンナルワ、シーギリア観光

ポロンナルワは10～12世紀のシンハラ王朝の首都の遺跡です。宮殿跡レンガ造りは当時の繁栄を物語り、一日かけて見学して廻りたい遺跡だと思いました。

シーギリアロックは、140年前、ジャングルの中から突然姿を現した、赤褐色の岩肌でできた城跡です。頂上まで登るには1200段の階段を上れるだろうかと心配でした。2人の現地ヘルパーに助けられ、どうにか達する事が出来たことは、良き思い出です。途中、岩肌に11名の美女のフラスコ画がくっきりと輝いています。この岩城で、11年も王様が住まわられただけに、広々としたプールや庭があり、多くの美女に囲まれ楽しめたのでしょう。



### 9月2日 ダンブッラ石窟寺院見学から帰国の途へ

ダンブッラ石窟寺院は20分位登った所に入りの口がありました。王様の寺として、三つの洞窟に直彫りで仏像や王様の像が彫られています。紀元前5世紀～18世紀後半の王様の権力と造り上げた人々の努力が偲ばれます。涅槃像の大きかったこと、足の裏にも蘭の花が描かれ足の大きさに驚きました。スリランカは、仏教文化の玉手箱のような国だと深く感じたことです。空港への帰路、移動中の5時間、牟田さんのハーモニカ演奏で口ずさみながら、時の経つのを忘れてしまいました。多くの方々のご協力で楽しい交流ツアーが出来ました。ありがとうございました。



里子の幸せを願って

伊藤恵子（東京都板橋区）

里子との面談の日、夫の里子是一目でわかりました。恥ずかしがりやのようで、面会の間、自分から話してはしませんでした。外国人と接する機会が少ないのですから、それは仕方ないことです。とても可愛く、幸せに育って欲しい気持ちが湧いてきました。

奨学金は、日本人にとってはわずかなお金ですが、この子が勉強を続け将来が開けるのなら、お金が生きるというものです。貧しい家庭を訪問し、その暮らしぶりを目の当たりにして、その感は一層強まりました。

三人の息子たちと再会を約束

鈴木千恵子（神奈川県相模原市）

面会の前日は、未だ見ぬ3番目の里子に会えるだろうか…と思いを巡らせながら眠りにつきました。当日会場に設けられた個々のテーブルへ、名前を呼ばれ二人の息子がきて、それから三人目が呼ばれた。「あゝやっと逢えた」との思いで、言葉が出ません。聞きたかったこと、伝えたかったこと沢山あったのに全部忘れて只々三人の息子の顔を交互に見詰めるのみでした。あっという間の半日、息子たちは帰る時間になりました。一昨年に初めて会ったときは、別れが本当に辛くて、そのときは涙が止まりませんでした。当時、里子である息子たちは、困惑したと

でした。当時、里子である息子たちは困惑したことと思います。

今回は涙はありません。お互いに健康ならば、もっと成長した彼等に逢えると思うと笑顔で別れることが出来ました。また来ますよ、と約束しました。



幸せのお手伝い

三重野英子（福岡市東区）

私の里子は、二人とも会いに来てくれていました。が思い浮かべていた通りの子どもたちでした。一人は、卒業後、病院で働いていたけれど、昨年結婚して、10月には子どもが生まれる予定とのこと。身重な体にもかかわらず、朝3時に起きてご主人と一緒に来てくれました。もう一人は17歳で、現在通学します。近郊に住んでいて、毎週土曜日には、日本語を学習するために、コーッテのセンターに通っていると話していました。将来は、日本語を教える先生になるのが希望だそうです。私たちの奨学金はささやかな支援ですが、子どもたちが、希望をもって生きていくためのお手伝いが少しだけできたようで、それを自分の目で確かめることができ、幸せな気持ちになりました。



交流会では生花を教えた。みんな熱心に学習してくれました。

再会はいつも楽しい

森下政信・薫（東京都調布市）

4度目のスリランカです。前回と同様、里子や日曜学校の子どもたちからの歓迎会を夜8時まで元気に続けてくれました。ありがたいことだと思います。翌日には、3人の里子たちと対面しました。いつも会いに来る卒業生2人と現在応援している子どもです。





素直に努力を重ねる子どもたち。  
日本が失ってしまった“時”を感じます。  
ときには内戦の厳しい現実にも、気持のしほむ日も

ありました。でも里子との出会いをいちど試したら、虜になってしまいました。  
次にまた行くのが楽しみです。

## まさかの対面に胸ときめく

美誉志洋子（茨城県つくば市）

今年をはずしたら私の里子ヴィトランギに会う機会をのがしてしまうかもしれない。そう考えてツアーに参加させていただくことにしました。ところが日本を出発する直前、彼女から事情があって会いに行けない、という手紙がとどきました。いよいよ面会の日、皆が次々と里子と手を取り合う姿をどんなにか眩しく思ったことでしょう。しかし、一人残った白い制服の小柄な女の子と目が合った時、私の心はときめきました。まぎれもなく彼女はヴィトランギでした。3時間半もバスに乗って、お母さんと共に来てくれたのです。私たちはナンダさんの通訳で時間一杯夢中で話をしました。今まで私はスリランカの女の子の成長と幸せを遠くから祈るだけで納得していたのですが、彼女の手を取って強く感じたのは、自分はこの子に責任があるのだということです。こうして思いがけなく面会がかなったことでこの旅行はかけがえのないものになりました。



里子の親ごさんとも、話をしてきました

C. P. I. に入会して、まだ5年目ですが、同行の会員のなかにはこれまで多くの里子を支援してきた方も、沢山おられました。引率して下さった理事さんや、現地のスタッフの方々と、直接お話しすることができて本当によかったと思います。

## “ガンバレ！ スリランカ”

伊藤信（東京都板橋区）

5月に里親になったばかりで殆ど何も分らない状態だった為、まずは現地を訪問して直に里子に会う事、そして、日本にとって大恩のあるスリランカと云う国を自分の眼で見て、少しでも理解を深め今後の行動指針になれば、そんな事を思って妻と共にツアーに参加しました。参加して感じたこと…（抜粋）

- 里親制度は、これからも継続していきたいとの事だが、既にもう20年が経過している。日本は戦後20年で経済復興を遂げた。
- スリランカも内戦が終わり、再び発展を目指すのだろう。早く里親制度が不要になる日が来るべきか…。でも当分は必要なのだろう。
- 内戦の為か、道路・建設物・その他のインフラは殆ど設備投資がされておらず古いまま。高速道路もこれから。国土は大部分が森林地帯。国家発展を何に求めるのか……。願わくは、あの素晴らしい森林とスリランカの人々の温かい心を残した発展であって欲しい。



貧しい国なのに乞食は殆ど居ない。笑顔と白い歯が印象的なスリランカを守って欲しい。

- “戦争は終わった。これからは力を併せて国を発展させて行こう”と云う大きな幕が沢山あった。教育里子達が、これからのスリランカの発展に、少しでも貢献して呉れれば、里親としてこれに勝るものは無い。頑張れ、スリランカ。

ウィムクティ君（14 歳）とは初対面であり不安があった。しかし、インターシティー（バス）の運転手である父親と来てくれていた。話を聞くと南部の町ゴールから朝 4 時に家を出発して来たとのこと。私のため（勝手な思いこみ）にわざわざ遠くから来てくれたとは感動、感動。ウィムクティ君は、教育里子になったことで、日本語も勉強することができると、喜んでいて。素直だ。勉強できるチャンネルが増えることをこんなにも喜ぶなんて素晴らしい。次回、私がスリランカを訪れる時までに日本語をマスターすると言ってくれた。彼は朝 5 時に起きて勉強し、それから学校に行く準備をして登校するらしい。勤勉だ。それに比べて自分は・・・見習いたいものだ。C.P.I. の活動の詳細、交流ツアーの中身、里子との



面談の仕方、いずれもほとんど何もわからない状態でのツ参加になったが、思い切って時間を作って行く価値が十分にあった。次回は我が子たちと同伴で訪れてみたい。そしてシンハラ語を少しでも覚えてウィムクティと会話をしたい。

## ■高原信博 福岡県小郡市

今回は、オブザーバーの形で参加しました。

三日目の里子との対面は、会員さん各人それぞれに面談を愉んでおられた。写真撮影役に徹しているうちに「俺も教育里子が欲しい」と思うようになっていた。男児三人の我々夫婦には女の子の里子が必要です。どうぞお世話をお願いします。来年は、退職する家内を連れて参加しよう、キャンディやダンブッラのホテルだと喜ぶだろう。ただ、歓迎会はうれしいが、時間的にはかくも長時間子供たちを拘束するのは如何なものか？ 2 時間ほどで切り上げるのが日本の風潮、これは我々の提案で事は解決するようにも思えるが。



## 活用してほしい、C.P.I.にある財産



憶えておられる方もおられると思いますが、これは 1999 年に日本国内で行った、40 日間日本縦断キャラバンの様子です。全国で約 3000 名の子どもたちが来場し、スリランカの農村生活のドラマに感動してくれました。私たちには、写真にある大背景幕や、キャラバンをやり遂げたノウハウがあります。若い世代の方々に、こうした財産を活用して頂けたらと思います。



8月27日、今回のツアー一行は、成田国際空港から午後2時すぎのスリランカ航空機で旅立った。モルジブ経由だったので、直行よりも3時間多い約12時間のフライトだった。入国審査を終え両替を済ませて空港ロビーで出迎える現地スタッフに会ったころには、深夜12時を回り、宿泊するタージサムドラホテル到着は、午前1時を過ぎた。

到着日の午前中、紅茶の店やスーパーマーケットで買い物をして昼食を済ませ、午後4時過ぎにスリランカ日本教育文化センターで歓迎式に出席。仏舎利でのお祈りを受けたあと、歌や踊りでの歓迎を受けた。

歓迎会は、C.P.I.の教育里子の卒業生のうち、日曜学校の先生を務めている人々が中心となって計画されたとのことである。キャンプファイアー行事まで行われ、なかなか充実しており、楽しめた。センターで夕食を済ませホテルへ戻りの時間は、かなり遅くなった。到着日の日程としては、かなりハードだったと思う。



29日は、いよいよ里子との対面の日。来てくれているだろうか？という不安と期待を胸に対面式に臨んだ。私の里子も4人内2人が来てくれた。もう1人は延泊して自宅を訪問することができた。美誉志（みよし）さんは、事前の里子からの手紙では、試験中なので会うのは難しいとのことだったが、いざ行ってみると、ちゃんと来てくれて、感激ひとしおだった。ほとんどの里子が来てくれて皆さんは、センターの職員の通訳を交えた交流を行った。この日の夜は、思いがけなく、コッテのペラヘラ祭りを見ることができた。有名なキャ

ンディのペラヘラ祭りは、1か月ぐらい前にすでに終わっていたので、まさかこの時期にペラヘラがあっているとは、思わぬ喜びとなった。

センターからいい席（無料）を確保してもらって、椅子に座っての観覧だった。夜の10時過ぎから始まって12時までの2時間を楽しんだ。象の数は100頭足らずと少なかったがココナツを使った松明があまりなく、写真やビデオがきれいに撮れて期待以上のものであった。30日から観光にでかけた。ピンナワラの象の孤児院、植物園を訪れたあとキャンディのホテルにチェックイン、キャンディアンダンスなどを見学した後、夜の仏歯寺を訪れた。31日には、ダンブーラに向かう途中で、スパイスガーデンを訪れ好評だった。そのあたりは、数多くのスパイスガーデンが点在して、楽しむことができる。

9月1日は、シギリヤとポロンナルワを訪れた。シギリヤでは、フレスコ画「シギリヤレディ」で有名なシギリヤロックの登坂に挑戦。遺跡や頂上の360度の景観を楽しんだ。第2の王朝があったポロンナルワでは、1500年前の遺跡に、皆感嘆の声。木彫りの工房や一般の民家も訪問、昔ながらの米の脱穀など素朴な生活を見せていただいた。内戦の激しかった1997年から2007年の間、そのあたりは爆弾の仕掛け等あり旅行するにはあまりにも危険であったが、いまは平和が戻っていて、今後のスリランカの発展が予想される感があった。スリランカ最後の日。ダンブッラの石窟寺院を見学後、マーケットでの買い物を楽しんだ。

今回は、各種お店やスーパーマーケット、市場などを訪れ、紅茶、宝石、民芸品などの買い物を十分に楽しめたこと。思いがけなくコッテのペラヘラが見学できたこと。また、3名の会員外の皆さんが参加され、一人は訪問前に入会いただき、C.P.I.事務局の迅速な手配で教育里子縁組をすることができ、現地で会うこともできた。あとの二人も里子との交流やスリランカの魅力に感動され、帰国後さっそく入会された。収穫の多い里子交流ツアーとなったと思う。

参加者の皆さん、ご寄稿ありがとうございました。  
誌面の都合で寄稿文全てを掲載できず、投稿を下された方々にお詫びいたします。（編者）



## スリランカ 現地事務所から

なにかな、なにかな???

ほんとの、ほんとのはなし

### ☆ ほんとに美味しいの？

スリランカのセンターでの食事は、たいていの場合赤い色をしたビタミンたっぷりの米と野菜カレー。粗食で栄養はとれているが、バラエティはない。ひと言でいえば「味気ない」。

しかし、ときどき、肉や魚が彩りを添えてくれる。写真の肉…見ている日本人は目を丸くしているが、山に住み、敵が来れば背中を針を立てる動物、そう…「山あらし」と呼ばれる獣である。これが結構おいしい。



臭みはまったくない肉である。はじめに解体するとき、針に用心が必要と言う。刺されたら、とにかく痛い。だから(?)この動物の、シンハラ語の名前は、「イッターワ」というのです。



(和名：インドカンムリ ヤマアラシ)

(注) 昔はこのトゲはペンに使われたという)

### ☆ 牛とお坊さん



この牛は、背中を撫でられるのが大好き

この牛の名は「シースイ」という。我々のスリランカの施設で飼っていた。今はマトガマの地域センターに預けられている。

SNECCの事務局長・チャンダシリお坊さんが、屠殺場に出かけて行って命を救った牛だ。そのきっかけは、小西会長とチャンダシリさんの共通の友人で、SNECCの副事務局長でもある、シーベリーさんが、癌の手術をすることになったことにあった。

スリランカでは、知人の重い病気を治す祈願の時、今しも殺されそうな動物を救うことで、祈願の力が増すことができるとされているとのこと。そこで、考えた末にチャンダシリお坊さんは屠殺場を訪れて、子牛を買い求めた。祈りは通じて、シーベリーさんの手術は成功し、「シースイ」は、ペットとして育った。

「シースイ」は、命を救ってくれた人を忘れない。チャンダシリお坊さんが散歩に連れて歩くとき……顔をすりよせて喜ぶ様子は、とても可愛い。呼べば大きな目をクリクリさせて鼻をならす。後足で立ち上がって『お手』をする。(大きくなったとき、これはちょっと危いことだが…)

牛がこんなにも人間になつく動物とはね…。皆さん、ビーフステーキを食べるときには、牛の冥福を祈っていただきましょう。